再臨のキリストによる
第〇福音書

—福音書シリーズの概略—

THE GOSPEL

BY CHRIST OF

THE SECOND COMING No.0

SEIDOU 正道

目次

はじめに
序 2

福音書シリーズの概略
第八福音書 6
第一福音書 9
第二福音書 14
第三福音書 18
第四福音書 23
第五福音書 28
第六福音書 33
第七福音書 38
第八福音書（ 公現について ） 42

予言の真実
二人の人物について 46
予知覚屈折の回避 48
福音書の分冊 52

はじめに

序

再臨のキリストによる福音書――僭越ながら、そんな大胆な題名の文書を公表させていただきました。

この福音書シリーズには、書籍にして、8 冊分の文書が収められています。シリーズの概略を紹介する本書を含めれば、書籍 9 冊分の文書ということになるでしょう。

⓪第〇福音書　「福音書シリーズの概略」

①第一福音書　「テロス第一」　キリスト教の完成と終末について

②第二福音書　「ヘルメスの杖・上」　小錬金術

③第三福音書　「ヘルメスの杖・下」　大錬金術

④第四福音書　「太陽を着た女」　公人生の記録

⑤第五福音書　「ヘイマルメネー」　星辰的宿命と、神話の現実化

⑥第六福音書　「テロス第二」　最後の審判

⑦第七福音書　「インターレグナム」　二つの王国の媒介

⑧第八福音書　「エピファニー」　宗教と科学の和声による公現

これらの文書を順次、電子書籍として刊行していく訳ですが、じつは私は、少しばかり常道を外れたことをしようと思っています。

すなわち本書「第〇福音書」の次には、あえて「第八福音書」を上梓するつもりでいるのです。０の次には１が来てこそ当然であるのに、あえてそこに末尾の８を持ってくる、と。

ついでに言うと、本書における “次の章” となる「概略」でも、まず最初に第八福音書の内容に触れることになります。

このように常道から外れた行いをするのは、この「第八福音書」にこそ、キリスト再臨の核心的「現象」が描かれているからです。

つまり私は、最初に第八福音書を刊行することで、皆さんに対し、ある意味で「論より証拠」を提示したいと思っているわけです。

その証拠に納得を得られた読者であれば、以後「第一」から「第七」までの福音書を、順番通りに読んでいくことは――それがどれほど長い道程になろうとも――さほど苦痛に感じることはあるまい、と私は考えます。

むしろ読者は、その長い道のりで、何度も「神の経綸に触れる喜び」を感じることになるのではないか、と私はそのように思っています。

それでは、まずは次章からの「福音書シリーズの概略」をご覧になってみてください。すべてのことは、その後のことです。

福音書シリーズの概略

第八福音書

第８（ 17 ）福音書　エピファニー

——宗教と科学の和声による公現

錬金術という宗教

皆さんは「錬金術」を知っているでしょうか。

名前ぐらいは聞いたことがあるかもしれません。ですが、そこに良いイメージを持っている人は、まずいないでしょう。おそらくは、

「怪しげな人たちが、工房で炉を燃やしている。そこで彼らは、屑のような材料から金を作り出そうとしている。彼らは人工の金で大儲けを目論んでいるけれども、失敗続きなので、貧乏そのものの暮らしをしている」

といった暗いイメージが、錬金術についての一般的なイメージだと思います。

しかし、私は錬金術を、化学的な色合いをもった “宗教” だと考えています。しかも、本質的に言えば、それはヨーロッパに現れた、仏教的な宗教だと考えているのです。

そのように仏教的であるため、錬金術では、いわゆる「悟り」が求められています。この悟りをして、私は「人間の神化」とも呼んでいます。

黄金＝神という図式

驚かれるかもしれませんが、私は、自分のことを、錬金術師であると思っています。なぜなら私は、錬金術のメソッド（ 方法論 ）によってこそ、自分自身の「人間の神化」を進展させていくことが出来たからです。

そして、この錬金術における、進展の最終のステージこそが「黄金の獲得」です。錬金術とは、その名のとおり「何らかの材料を練り上げて、黄金を獲得するまでの術式」であるのです。

かかる術式の最終到達点である黄金は、錬金術ににおいて、神とイコールで結ばれています。つまり「黄金＝神」ということです。中世ヨーロッパの錬金術師である、ミヒャエル・マイヤーは端的に言っています。「神は、黄金において認識される」と。

GW170817

他方で私は、自分を「再臨のキリスト」であると考えています。自分という人間が、ノストラダムスや、旧約の予言者たちによって、その出現を予言された「再臨のキリスト」であると考えているのです。

さしあたって彼ら（ ノストラダムス、ダニエル ）が語ったキリスト再臨の予言は、その成就の時として、2017 年を指し示していました。

そして、この 2017 年の私の誕生日に、天に「黄金の創造」が示されたのです。

それは天文学者カール・セーガンが「星の錬金術」と呼んだ、星辰現象による金元素の生成でした。

このとき創造された黄金の量は、地球そのものの質量の数倍にも相当したそうです。人類にとっては、無尽蔵の黄金と言っても間違いではないでしょう。これは天文学上の、一大ニュースとなりました。

しかも、私の誕生日である 1973 年の 8 月 17 日は、ノストラダムスの予言と、聖母マリアの奇跡によって、ずっと昔から聖別されていたのです。

ノストラダムスは「70 と 3 の年、オクトーブル（ 8 ）の月」と言い、聖母マリアは、1973 年の 8 月 17 日を挟んで（ その挟み方が実に巧妙なのですが ）自身を模した木像から汗や涙を流すという超常現象を起こしているのです。これはバチカンが唯一認めた、日本における奇跡現象でもあります。

もっとも、宇宙の彼方で「黄金の創造」が実際に起こったのは、今から 1 億 3000 万年前のことでした。その現象の余波が、重力波という形で、2017 年 8 月 17 日に、地球に届いたのです。

そのため、この黄金の創造は「GW170817」と呼ばれています。GW とは、グラヴィテーション・ウェーブ（ 重力波 ）のことです。

つまり「GW170817」とは、2017 年 8 月 17 日に観測された重力波、という意味の言葉なのです。

なお、科学的な話をするならば、この日、史上初めて「金という物質が、どうやって世界に創造されるのか」が理論化されたのでした。その日まで、金の生成に関する「仮説」はあっても「確定説」はなかったからです。ながらく金は、科学者たちにとって「謎の元素」だったのでした。

神と人間の一致

黄金の創造を意味する「GW170817」は、黄金をもって神と同一視する錬金術のフィルターを通せば、まさしく「創造神の出現」に他なりませんでした。

かくして、天空に「神の徴」は現れました。しかも、その徴は、私という人間の記号（ キリスト再臨の年における私の誕生日＝ 2017、8、17 ）に、僅かなズレもつくらずに接合したのです。キリストとは、すなわち「神と人間の一致」です。

もちろん 8 月 17 日に誕生日を迎えた人間は数多といるでしょう。

しかし「黄金＝神」の図式をもった錬金術の徒である――かつ再臨のキリストを自称している――人間が、この日に誕生日を迎えられる確率は、どう考えても「限りなく低いものである」と言わざるを得ません。

そして、聖書のなか（ マタイ ）で、イエスはこう言っていたのです。

「そのとき人の子（ ＝キリスト ）の徴が天に現れる」と、そう。

有神論を取り戻す

再臨のキリストの役割は、この世界に有神論を取り戻させることです。すべての人間に、神の実在を、ファクトとして実感させることです。そうして、無神論の暗い世界から、人々の心を救い出すことにあるのです。

そのために必要な “教え” は、第一から第七の福音書のなかに、すでに提示してあります。それに対して第八福音書は、その教えの正当性を、奇跡現象（ 徴 ）によって裏付けるという役割を担っているのです。

第一福音書

第１福音書　テロス第１

――キリスト教の完成と終末について

人間の神化・神の人間化

まず「テロス」という言葉について、説明しておきましょう。

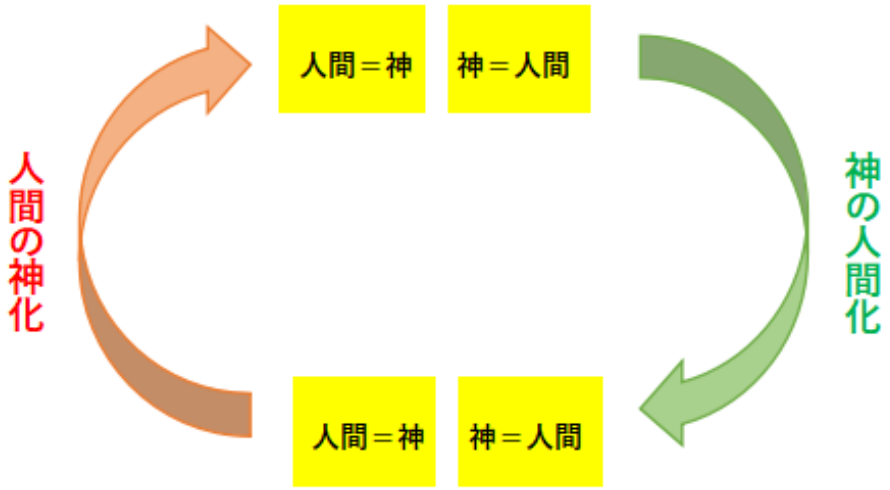
このテロスとは、ギリシア語で「完成」と「終末」を意味しています。つまりギリシアでは「完成＝終末」である訳です。

そして、私の「福音書シリーズ」は、その言葉どおりの役割を持っています。

すなわち「福音書シリーズ」とは、キリスト教を完成させ、それにより、この宗教に終末をもたらすための文書であるのです。

とくに第一福音書は、その役割のシンボル的作品だと言えましょう。そこで私は「テロス」という言葉を、直接タイトルのなかに組み入れたのです。

そして、この「テロス第１」は、福音書シリーズの枠組みを規定してもいます。



2022-05-18＼（２＼）.png

上の図を見てください。これは、第一福音書で使った図版です。

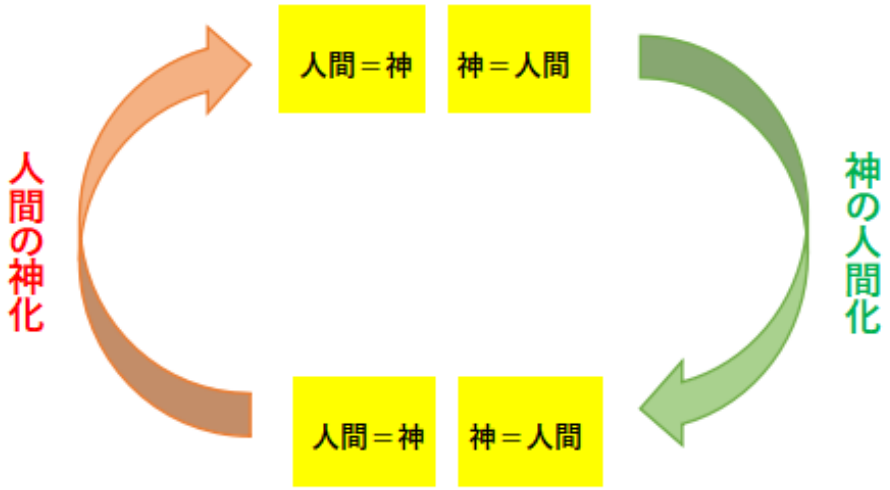
ここには二つの矢印が書かれています。上向きの矢印である「人間の神化」と、下向きの矢印である「神の人間化」です。

そして二つの矢印は、上下の「人間＝神・神＝人間」で橋渡しされています。

実は、この数少ない情報が「福音書シリーズ」で描かれることになる内容の、ほとんど全てなのです。ここに、福音書シリーズの基本的な枠組みが、ほぼ完全に網羅されていると言っても過言ではありません。

図の解説

再び同じ図を掲げてみましょう。



2022-05-18＼（２＼）.png

上図に含まれている情報を、文章として表すと、次のようなことになります。

人間は、悟りによって霊的に上昇していき、ついに神の認識にいたる。それが「人間の神化」である。

そうして認識上、人間が神になりきり、神と人間がピッタリと重なり合った状態が、上方の「人間＝神」ということになる。ここでは仮に、その状態を成立させた者を「神人」と呼んでおくとしよう。

この神人は、このあと「人間＝神」という方向性から「神＝人間」のほうへと向き直る。つまり、かつて人間として神を目指した神人は、今度は、神として人間のほうを見やるのである。

そのとき彼の目に映るのは、迷い悲しむ人類の姿である。そこで神人は、彼ら人類を救うために、地上の世界へと降りていく。

このとき彼は、人間たちを救うに相応しい姿をとることになる。すなわち神人は“人間として”生まれてこようとする。これが「神の人間化」ということである。

人の子として生まれた神人は、神が人間になりきり、神と人間がピッタリと重なり合った状態を体現している。これが下方の「神＝人間」ということである。

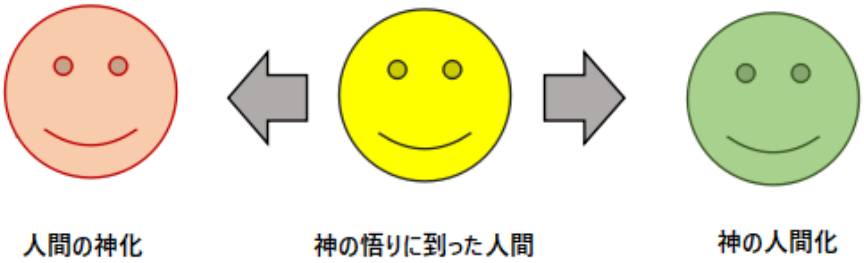
二通りに解釈できる一人の存在

上述しました「神と人間のドラマ」は、見てのとおり、ごく単純なストーリーです。ですが、それはまた、恐ろしく壮大なスケール感をも、持ち併せていると言えるでしょう。

ところがです。この壮大なドラマが、実際に「神の認識に至った人間」の中においては、まるで一コマ漫画のように、静止したまま、余すことなく、十全に表現されてしまうのです。

つまり神人である彼は、そのままの状態で、神でもあるし、人間でもあるということです。

よって彼という存在そのものが「人間の神化」であると解釈できるし、逆に「神の人間化」であるとも解釈できるのです。



2022-05-18＼（１＼）.png

そうだとすれば、かかる「神の認識に至った人間」は、自分の履歴を通して「人間の神化」を説くことも出来るし、またわが身をして「神の人間化」という形での自己紹介をすることも出来る訳です。

まことに彼は、その身ひとつで、矢印の両方を語る資格を持っているのです。

福音書シリーズの流れ

この福音書シリーズは、まさしく、そういう語り口で綴った文書です。

すなわち、まず二つの矢印のうちの「人間の神化」を詳しく語ったのが、第二と第三の福音書であるのです。

そして、第三福音書の終わりにおいて、ついに人間は、神の高みへと至ります。これを、より正確に表せば、第三福音書の終わりにおいて読者は、キリスト教における「神の定義」を理解することになるのです。

それはつまり、認識上における「人間＝神」の成就です。

そして、その続きとして、第六福音書で「神の人間化」が語られることになります。すなわちそこでは、下向きの矢印に乗って「人の子となった神」が地上に現れることになるのです。

この「人の子となった神」を「人の子」と略してみましょう。するとそれは、聖書における、イエスの自称名詞となります。そして、その名詞の意味するところは、救済宗教における救世主（ キリスト ）に他ならないのです。

新約聖書によれば、終末のときにキリストが再臨して、最後の審判をくだすといいます。

そして第六福音書で語られるのは、まさに人の子（ キリスト ）が現れたという宣言。そして、そのキリストが下す「最後の審判」に他ならないのです。

それだからこそ私は、第六福音書にも、第一福音書と同様の「テロス」のタイトルを与えました。終末の意味を持つ「テロス」というタイトルをです。この二つ目のテロスとなった、第六福音書の正確なサブタイトルは「テロス第２」ということになります。

枠組みをつくる第一福音書

――このようにして、第一福音書『テロス第１』は、福音書シリーズに、その構成上の「枠組み」を与えています。少なくとも、第二、第三、第六の福音書は、この『テロス第１』によって、厳密にその枠組みを与えられています。

それ以外の福音書（ 第四、第五、第七 ）は、この基本的な枠組みへの、追加的なカスタマイズと考えていいでしょう。

第四、第五福音書は、自伝的要素が強い作品ですし、第七福音書は、キリスト教の「完成・終末」のあとにやってくる「転換」について述べた文書だからです。

そして第８（ 17 ）福音書では「私がキリストであるということ」の証拠となる徴が、万民に対して公にされるのです。

第二福音書

第２福音書　ヘルメスの杖（ 上 ）

——小錬金術

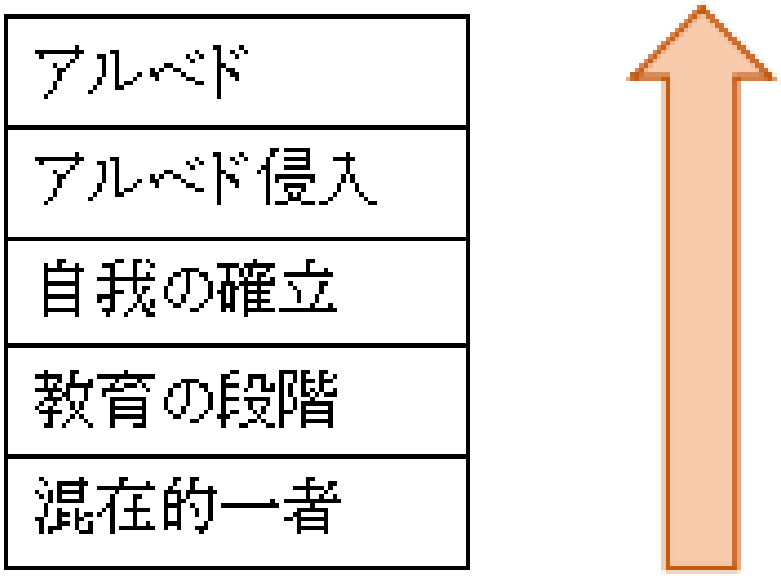
悟りの階梯

第二、第三福音書は、第一福音書で語られた「上向きの矢印」の詳細を明かすものです。

この「上向きの矢印」とは、換言すれば「人間の神化」ということです。

それは人間が神に向かって上昇していく軌跡であり、神の視座まで続いていく“悟りの階梯”です。

第二福音書では、その階梯の様子が、錬金術的見地から、だいたい全体の八合目ぐらいまで描写されています。それを図によって表すと、下のようなものになります。



2022-05-18（３）.png

では、これら五つの階梯を、以下で、簡単に説明していきましょう。

混在的一者

これは、赤ん坊としての主体が、母親の胎内で安らい、憩っている状態を指しています。あるいは、それに加えて、出産されてから 10 か月ぐらいまでの主体をも指しています。

この、母親によって完全に保護されている主体は、非常に無力な存在です。

肉体的にだけではありません。意識性、思弁性、弁別性、そのいずれにおいても、非常に脆弱です。いえ、弁別性にいたっては “ない” と言ってもいいでしょう。

そのため、主体の意識のなかで、自分と他人を分けるものは、ほとんどありません。いちばん身近にいる母親などは、主体は「自分自身」だと思っているぐらいです。

であるからこそ、母親が自分の欲求にそぐわないと、主体はそれを不当だと感じて、泣きじゃくるのです。赤ん坊である主体が、もしも言葉を話せたなら、彼は母親に、

「お前は私だろう。なのに、なぜ私の思い通りにならないんだ」

と喚きながら抗弁することでしょう。

教育の段階

共同体（ 家庭→学校→職場→国民意識 ）から与えられる教育を通して、主体は、だんだん「自分と他人の違い」を理解していきます。

他人が、自分の思い通りにはならないこと。他人が多く集まったところ（ 共同体 ）には、その多人数が共存できるようにするための「社会的ルール」が現出すること。その共同体で暮らすためには、自分もまた、その社会的ルールに従わなければならないこと、などを知っていくのです。

しかし、国家という大きな共同体もまた、世界史的に見れば、あるいは国際正義的に見れば、その倫理的な在りかたを誤ることがあります。

そうした時に、主体が「自分は、より正しくあろう」と願うならばです。そのとき彼は、共同体の正しさを超出して、自分自身の判断力で “正しさ” を求めざるを得なくなります。

自我の確立

自分自身で追求した正しさであるならば、それは「主体の正しさ」であって、「共同体の正しさ」とは別のものになります。たとえそれが、共同体の正しさである「法律」と一致していたとしてもです。それは二本の平行線が、たまたま同じ地点で止まったということに過ぎません。

ですから、この段階における主体の正義は、法律と一致することも、法律と一致しないこともあるのです。

共同体とは、基本的には「他人の集合体」です。これと自分を弁別した主体は、いまや「自他二元」の境地にあります。すなわち「自分と他人は、別原理のもとにある」という認識を持ったということです。

ここに至って主体は「決して他人ではありえない自分」を確立したことになります。これが「自我の確立」ということです。

アルベド侵入

自我の確立段階は、自律性の極限を指し示しています。つまりそれは、主体が「自主的な努力」によって手に入れられる、精神的な成長の限界点であるということです。

このため、ここから先の主体の成長は「他者からの助力を受けたもの」へと移行することになります。

といっても、ここでいう「他者」は、主体の外部にいる訳ではありません。それは主体の深層心理に存在しているのであり、名を付けるなら「内的客観」と呼ばれるべきものです。この内的客観こそが、主体の成長を促すのです。

そして、この深層心理、内的客観は、そのもっとも奥深いところで「無限、永遠、救済」とつながっています。私はこの「無限、永遠、救済」をして、「アルベド」と呼んでいます。アルベドとは「白化」を意味する、錬金術の用語です。

このアルベドが、主体に、インスピレーション（ 霊感 ）として働きかけます。そうやって主体の内側から、他力的な助力を与えるのです。このことをもって、私は「アルベド侵入」と呼んでいます。

アルベド侵入の規模は、主体の成長とともに拡大化されます。最初は、気まぐれ程度の頻度で少しだけ。やがて日常的に、まとまった質と量が。そうして晩期には、ついに主体が「アルベドとの直接的な合一」をする “寸前” にまで到ることになるのです。

恩寵の原理

恩寵の原理とは、主体がアルベドと合一するさいに働く「心理的メカニズム」です。「無限、永遠、救済」であるアルベド――それは実は、最初にお話しした「混在的一者」の、霊的、高次元的な写し絵でもあります。混在的一者をして、それを「母子一体感」と言い換えてもよいでしょう。

つまりアルベドは、霊的ではあっても「母の子宮」のようなものなのです。ゆえに、そこに貫入するためには、主体は、細い産道を遡上できるような “小ささ” を獲得しなければなりません。アルベドと主体をつなぐのは、イエスが語った、あの「狭き門」と同様の隘路なのです。

そのためにこそ、アルベドへの貫入にさいしては「恩寵の原理」が働くことになります。

この「恩寵の原理」により、主体はその瞬間、きわめて深刻な「寂しさ」「虚しさ」「罪の意識」に苛まれることになります。

換言すれば、そのとき主体の心は、限りなく頼りないものとなり、怯えた小さいものとなり、胎児のように無力なものとなるのです。これほどの “小ささ” ならば、どんなに狭い隘路でも通り抜けられるだろう、というほどにも。

そして、この胎児のような無力さに、アルベドの母性本能が反応します。アルベドは母心そのままに主体を抱き、主体を容れ、主体と一つになるのです。これが他ならぬ「恩寵」です。このような母性愛的な救済力によって、主体とアルベドとの合一は起こるのです。

ここまでが、第二福音書『ヘルメスの杖、上』の内容になります。

第三福音書

第３福音書　ヘルメスの杖（ 下 ）

——大錬金術

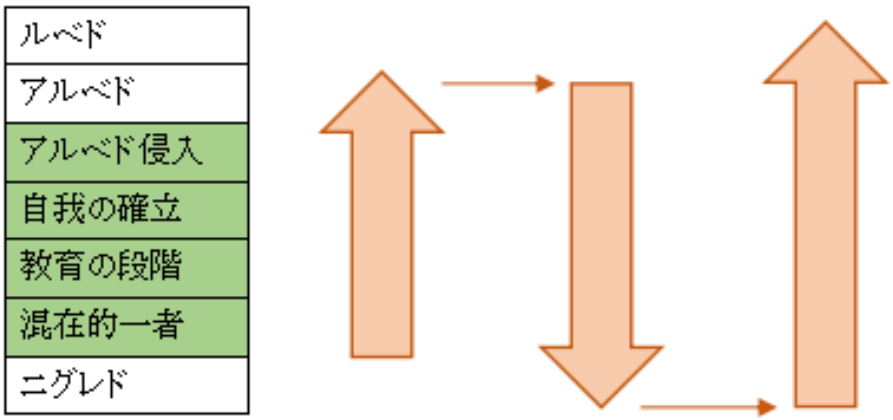
アルベド・ニグレド・ルベド

第三福音書は、基本的には、第二福音書の続きです。かの上向きの矢印（ ＝主体の成長 ）は、本書の最後において、ついに神の視座まで到達することになります。

それでは本題に入りましょう。第二福音書の末尾で語られた「恩寵の原理」は、主体がアルベドに到達するためのメカニズムでした。そして本書において主体は、実際にアルベドの段階に参入します。

そのため本書では、アルベド、ニグレド、ルベドの順で、主体の成長が語られることになります。これらは、いずれも錬金術の用語で、それぞれ「白化」「黒化」「赤化」と訳されています。

その進展の順序を図示すると、以下のようになります。



2022-05-18 ＼（ 4 ＼ ）.png

アルベド（ 存在の原理 ）

では、まず最初に、アルベド（ 白化 ）についての概略を語りましょう。

アルベドは、空間的に見ると「無限」です。そして、この「無限」に含まれない空間はありません。もしも「無限」に空間的限定があるならば、それはもはや、無限とは呼べないからです。

ゆえに無限とは「空間そのもの」の別名です。言い換えれば、これを空間における「存在の原理」と呼ぶことが出来るでしょう。

つぎに、アルベドは、時間的に見ると「永遠」です。そこには、過去、現在、未来の全てが含まれています。ここに含まれない時間はありません。

ゆえに永遠とは「時間そのもの」の別名です。言い換えれば、これを時間における「存在の原理」と呼ぶことが出来るでしょう。

そして、アルベドは、倫理的に見ると「救済」です。

上述したように、アルベドは、すべての空間と、すべての時間を内包しています。そしてアルベドは、それらの時空を、余さず自身の愛で満たそうとします。その愛によって救済されない人間は一人もいません。ゆえにアルベドとは「絶対の救済」です。そして、人間にとっての真の救済とは、結局、このアルベドとの合一のことです。

アルベドによる救済は、すべての人間の個性に適応され、永遠の時間のなかで、必然的に、その成就のときを迎えることになります。いえ、元来から永遠であるアルベドの中では、その救済成就は、とっくに既成事実となっているのです。

それゆえ倫理的にも、これを「存在の原理」と呼ぶことが出来るでしょう。それは「存在する全ての人間に、適応しうる救済の原理」であるからです。

アルベドからの下降

上記アルベドの「無限、永遠、救済」は、十二分に神的なものです。

しかしながら、それでもなおアルベドは、キリスト教の神概念とは一致しません。存在の原理（ 存在の神 ）では、どうしても新プラトン主義的な、汎神論の範疇に留まってしまうからです。

反して、創造神を戴く、キリスト教における神の定義は「無からの創造」です。そして、このごく短い定義文を――より精確を期するために――少しばかり展開して広げれば「虚無からの存在の創造」という文章になるはずです。

虚無からの存在の創造。一見して明らかなように、ここには「虚無」と「存在」と「創造」という、三つのファクター（ 要因 ）が含まれています。

アルベドにおいては「存在」は現出していました。それは私が、存在そのもの、存在の原理と呼んだものです。

しかしそこでは、まだ「虚無」が現れていません。そしてもちろん、この虚無がなければ「虚無からの創造」という情景も描くことが出来ません。

そして当然、それではダメなのです。それでは材料の面で「片手落ち」と言わざるを

得ないからです。

要するに、アルベドの段階に留まっていては、「キリスト教における神概念」を語るための材料が足りないということです。

そこで主体は、いまやアルベドの高みから下降し、地表を穿ち、ついに地下の暗闇まで到達しようとします。

彼はその暗闇の中で「虚無」を見つけようとするのです。この虚無が、錬金術において「ニグレド」あるいは「黒化」と呼ばれているものです。

ニグレド（ 虚無の原理 ）

ニグレドとは、簡潔に言ってしまえば「自分自身を虚無と感じるほどの、徹底した自己放棄」のことです。この段階にいたった主体は、他人の意識のうちに溺れ、自分を見失い、ついには単なる盲目的なエネルギーにまで還元されてしまいます。

そのエネルギーは、当然のこと匿名的なエネルギーであって、もはや誰のエネルギーであっても構いません。あるいは、誰のエネルギーであっても同じことです。このようにして主体は、自らをして「人格的虚無」を体現させることになります。

この段階に至るための具体的な手段としては、群集心理に身を任せるほか、性的オルギアや、音楽や踊りによる興奮などを挙げることが出来ます。

しかし、このあたりの事情は、非常に暗く淫靡であるため、誤解を生みやすい “危うさ” に満ちています。

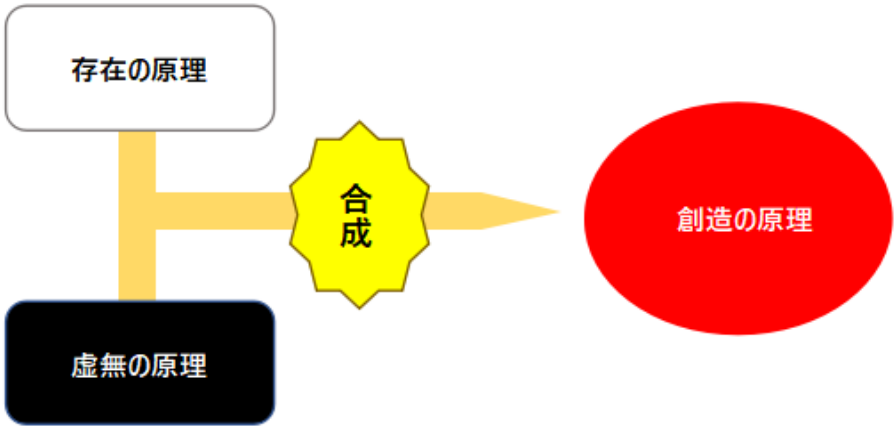
ですからここでは、あえて深く立ち入らないことにしましょう。第三福音書と第五福音書の本文で詳しく考察していますので、興味があれば、そちらで確認していただければと思います。

ここではニグレドが――アルベドの「存在の原理」に倣うならば――「虚無の原理」と呼べるものであることだけ、明記しておきましょう。

ルベド（ 創造の原理 ）

アルベドにおいて「存在の原理」を体験した主体が、さらにニグレドの「虚無の原理」をも体験したとしましょう。

すると主体の中で、それら二つの原理が合成されて、ついに「虚無からの存在の創造」の相が現れることになります。



2022-05-22.png

これが「無からの創造」であり、「創造の原理」です。

それは換言すれば、キリスト教における「創造神」の顕現であり、主体にとっては「神の認識」「神の悟り」の達成ということになります。

これによって「上向きの矢印」は、ついに神の視座まで届いたことになります。

アルベドからニグレドへの下降さえも、役割的には「神に至る道」にあたります。ですから、これもまた「上向きの矢印」に含まれると考えていいでしょう。

錬金術においては、この「無からの創造」「創造の原理」は、ルベドと呼ばれています。

日本語では「赤化」と訳されますが、この赤は「夜の暗闇から生まれる、あかつきの赤い光」を寓意していると考えられます。

そして、闇夜から昇った赤い曙光は、やがて昼間の白日へと、受け継がれることになります。

かかる「闇夜―曙光―白日」という時間経過には「虚無―創造―存在」のメタファー（ 寓喩 ）が隠されていると言えるでしょう。

神の人間化への展望

いまや主体は、神の視座に立ちました。ということは、ここに「人間＝神」の図式が成立したのです。第一福音書で提示した、あの上方の到達点です。

錬金術的に見れば、主体はここで黄金を得たことになります。錬金術においては「神＝黄金」であるからです。あるいは「神は黄金によって認識される」からです。

この「神＝黄金」の図式が、第八福音書における「神の公現」の重大な伏線となります。ですから、どうか心のどこかに、ここのくだりを留め置いておいて下さい。

さて、「人間＝神」が成立したのであれば、福音書シリーズの流れは、ここから「神＝人間」という反転現象、つまり「神の人間化」へと続いていくべきでしょう。

より文学的に表すならば、ここからダイレクトに「人の子となった神の現出」や「キリスト（ 人の子 ）の再臨」といった話へと、ストーリーが続いていって然るべきなのです。

しかし、そのストーリーの流れは、第六福音書までは留保されることになります。それは、第四、第五福音書において、私の自叙伝が描かれることになるからです。

第四福音書

第４福音書　太陽を着た女

——公人生の記録

ロクデナシの告白

ヨーロッパにおける「三大自伝文学」として、アウグスティヌスの『告白』、ルソーの『告白』、ゲーテの『詩と真実』が挙げられることが多いようです。

この三つのうち、ゲーテはそうでもありませんが、アウグスティヌスとルソーは——あくまでも私見ですが——読むと「この主人公は、とんでもないロクデナシだなあ」と思わずにはいられなくなります。事実この二人は、読んでいるほうが恥ずかしくなるような内容を、惜しげもなく披露してくれています。

そして、私の第四福音書もまた、この「ロクデナシ自伝」の系統に連なっていると言えるでしょう。まことに、どうしようもないロクデナシが、生々しく自分について語ったのが、この『太陽を着た女』なのです。

それでもこの自伝は、決して私小説ではありません。私には「私の人生は公のものである」「私の人生は多くの人々のためのものである」という強烈な確信があるからです。

むしろ私には「これを公にしなければ、私は死後、神さまに叱責されることだろう」という確信すらあるのです。

そんな第四福音書は、三つの部分に分けられています。そして、それぞれの部に「然るべきときに、私を然るべき悟りに導いてくれた女性」が配されています。それが「月に待つ女」「太陽を着た女」「地に憩う女」の三人です。

彼女たちの存在は、疑いようもなく、私にとって必然でした。

というのも私は、女性の存在なしでは、哲学的、宗教的に悟れない、ある意味で、特殊なタイプの求道者だったからです。

第一部「月に待つ女」

月はアルベド（ 白化 ）のシンボルです。人格的にいうと、キリスト教圏では、聖母マリアがその象徴を担っています。他には、月の女神であるイシスやアルテミス、ゲーテの「永遠に女性的なるもの」などが、同じような役割を担っていると言えるでしょう。

聖母マリア――処女にして母親であるマリア。

彼女は要するに、霊的な母性の持ち主です。私にとってそれは、自作の小説『アトラス』の主人公である、チェリアと重なり合う存在様式でした。このチェリアもまた、14歳の少女にして、霊的な母性の持ち主だったからです。

この小説『アトラス』を執筆したのは20歳のころでした。

しかし、チェリアという主人公を形成するために、私はまず、14歳のときに、同級生への初恋を経験しなければなりませんでした。はじめて付き合った女性でもある彼女こそは、チェリアの直接のモデルであったからです。

しかし、シーナという名前の、その初恋の相手の前から、卑怯にも私は逃げ出してしまいました。私は恋愛よりも、思索をとったのです。

そして、そのシーナからの逃亡劇のなかで、私はしだいに、闇と悪と汚れとにまみれていきました。

堕落した底辺人生における塗炭の苦しみ、そのような状態にあったと言えましょうか。

そのような深刻な苦しみのなかで、逆に私は、焦がれるように、心の救いを求めました。

そうして救いをもとめるうちに、ついに私は「霊的な母性による救済」に出会いかけたのです。

そこには姉（ 次女 ）の出産、姉（ 長女 ）の不妊という、二つの出来事が関わっていました。

私は、その二つの出来事を、心のなかで「肉体に拠らない母性の発現」つまり「霊的な母性」という一つの状態にまとめ直したのです。

それは私にとって、霊的な母性による救いの “予感” でした。

そして、その予感を明確な体験に高めるために、私は20歳のときに『アトラス』という小説を執筆したのです。それは14歳の少女（ 処女 ）が、肉身に拠らない、霊的な母性を発現するという物語でした。

母性による救済

かくして私は『アトラス』を書き進めていきました。

ただし、ここで注意すべきことがあります。それは、この小説の書き手の実質は、私ではなく、私の手を操る霊的な存在であったことです。

つまり執筆は宗教的な儀式であり、小説内におけるチェリアの言動は、実質的には、霊的な啓示だったのです。

そしてチェリアは、物語のクライマックスで、ついに霊的な母性の体現者となりました。彼女は物語のなかで「聖母子」の画面を描いたのです。

そのときの彼女の姿を見て、私は自分の頬をつたう涙を止められなくなりました。

自分が汚れているからこそ、私は、この母性の美しさを、敏感に感じとることが出来ました。聖母チェリアの前に、私は圧倒され、心潰され、どこまでも小さな魂となりました。

そして、その小さくなった魂を、チェリアが温かく包み込んでくれたのです。その精妙なる霊的な母性によって。

かくして私は、小さな胎児を、子宮が包み込むような形でもって「霊的な母性」と合一しました。そしてそれは、母性原理の真理である「アルベド」を体験したということでもあります。

また、このアルベドは、第三福音書のところでも述べたように「存在の原理」と呼びうるものです。

第二部「太陽を着た女」

私はアルベド体験によって「存在の原理」を悟りました。しかし私には、いつまでもその悟りに留まっていることは、許されませんでした。

アルベドは、いわゆる「神秘主義」の体験と同じものです。

そして神秘主義者（ 神秘体験者 ）は、歴史上に数多と存在していました。

しかし私は、そうした彼らの次元から、さらに一頭地抜きん出ることを、運命によって、固く義務づけられていたのです。

私は「存在の原理」をこえて、その上の「創造の原理」にたどり着かなければなりませんでした。

そして、かかる「創造の原理」を手に入れるために、私は「虚無の原理」を体現している女性を、愛さなければなりませんでした。なにぶん私は、女性を通してでなければ、悟りの機縁を得られない、エロス・タイプの求道者であったからです。

ここで言うエロスとは、対立物の合成のことです。

とにかく私は、何としても、この心のうちに「虚無」をインストールしなければならなかった。そうしなければ「存在」と「虚無」の合成物であるところの「虚無からの存在の創造」を形作れないからです。

私がいなくなっていました

では、このとき私が愛した女性を紹介しましょう。

陽子（ 仮名 ）は、他人の意見ばかりを受け入れて生きているうちに、自分の主体性を見失ってしまった女性でした。実際にそのことを証明するような、何とも悲劇的なドラマがあったのです。

それについては、ここでは触れませんが、ただ彼女は、はっきりと私に言いました。「いつの間にか、私がいなくなっていました」と。

そこには確かに、文字通りの「人格的虚無」がありました。そして、そんな彼女と心

を重ね合わせることで、私の心のなかに「虚無」が流入してきました。

かくして、私の心のなかに「存在の原理」と「虚無の原理」の二つが揃ったのです。あるいは「存在」と「虚無」が両方とも揃ったのです。

それら二つが合成されて出来たのが「虚無からの存在の創造」の相でした。それはまた「無からの創造」「創造神」「創造の原理」とも呼べるものでした。

錬金術の用語を使うのであれば、これが「ルベド」と呼ばれているものです。日本語では「赤化」と訳されている、錬金作業の最終段階です。

なぜそれが赤いのかと問われれば「夜の暗闇と昼の白日を結びつけるのは、いつだって暁の赤い光だからだ」と答えることが出来るでしょう。

第三部「地に憩う女」

いつしか陽子は、私の眼前からいなくなりました。結局、現実を生きている私たちは、結ばれる運命にはなかったのです。

しかし、それから間もなくして、私は妻と出会いました。そして、それから七年後、二人は結婚しました。

穏やかな日常のなかで、私の宗教性は、しだいに家庭生活の背後に回るようになりました。そこに現出したのは、あまりにも世俗的な男の姿だったのです。

それは普通の夫であり、普通の父であり、普通の家庭の世帯主でした。

しかし、心の奥底にしまわれた私の宗教性は、10 年の沈黙を経たのちに、ついに大きく悲鳴を上げたのです。このままではいけない、と。

そして、その叫びに感応したかのように、天から「超新星」が降ってきました。このことを教えてくれた占星術師によると、それは宇宙のどこかで生まれた、巨大な霊力の塊なのだそうです。

その「超新星」の降臨日時は、2013 年の 4 月 16 日の夜でした。

ときにマイケル・モルナー博士という方が、イエス・キリストの “本当の誕生日” を算出したのですが、その日が 4 月 17 日でした。

そしてユダヤでは、一日が夜から始まるので、イエスのもとに「ベツレヘムの星」が降ったのは、私たちのカレンダーでいうところの「4 月 16 日の夜」ということになります。

つまり、私とイエスは「星の降臨」という出来事と、その星の降臨日とを、完全に共有しているのです。さらにはまた、マギ（ 占星術師 ）という存在までも。

もちろん、これを読んでいる方にとっては、信じがたい話でありましょうし、すんなりとは受け入れがたい話でもありましょう。

そうだとしても、超新星の霊的なエネルギーは、それを受け取った、私の宗教性を賦活させ、ここに新しい悟りをもたらしました。

加えて、新しい作品の執筆意欲と、それを現実化するための活力をも、私に与えてくれたのです。

それにより、この時の出来事から四年経たときには（ 2017 年 ）、私は、第一から第七

までの「再臨のキリストによる福音書」を完成することが出来ていたのでした。

ただし、このときの福音書シリーズ（ 初稿 ）は、第八福音書執筆後に、大規模な改訂を経ることになります。

よって、初稿の内容と完成度は、今回お見せする福音書シリーズとは、かなり異なっていることを付言しておきます。

第五福音書

第５福音書　ヘイマルメネー

――星辰的宿命と、神話の現実化

星辰的宿命

ヘイマルメネーとは、ギリシア語で「星辰的宿命」という意味です。これを「夜空の星の配置が形作る、人間の運命」と言えば、分かりやすいでしょうか。

この第五福音書の根本的なテーマは「私を通して、イエス・キリストが、本当の人間になりきる」ということです。

そのテーマを実現するために、私に多くの星辰的な運命が降り注いできた、というのが本書の基本的な体裁だと言えるでしょう。

確認しておくと、キリスト教の教義上、イエスは「人間として生まれてきた神」であります。彼は 100 パーセント人間で、しかも 100 パーセント神でもある。

そして、それら両極の要素が、総合されて一つになっている、そういう存在だとされているのです。

三位一体の教義

第一位格、父、神	すべての創造者、唯一の神
第二位格、子、キリスト	神と本質を共有し、肉体を持った“人間”
第三位格、聖霊、パラクレート	父ならびに子から発出する霊的なはたらき

2022-05-18（６）.png

しかし、母マリアによる、かの処女降誕によって、イエスは「人間としては 100 %を満たせない存在」になっています。

本来的には――キリスト教の教義上――人間ならば誰でも「原罪」という、いわば「悪を行う傾向性」を持っています。

ところがイエスは、この原罪を持っていません。彼はこの世に生まれたときに、この原罪を得る機会を、決定的に奪われてしまっているのです。

もともと原罪は、親からの遺伝によって、子供に伝わることになっています。

しかし、父親からイエスに遺伝するものは何もありません。系図に父ヨセフの名前があっても、教義上、マリアの本当の夫は、決してこのヨセフではないからです。

マリアの本当の夫は「聖霊」だとされています。聖霊がマリアの子宮に宿り、それが月満ちてイエスとして、この世に生まれたことになっているのです。

ゆえに、ここには夫の遺伝子を送り込むはずの精子は、まったく介在していません。

そればかりか、妻マリアの遺伝子すら、1854 年の「無原罪の御宿り」の教義によって、原罪の伝達能力を奪われてしまいました。結果、ヨセフとマリアは、全く「原罪」と関わりがないところで、イエスの出産を行ったことになるのです。

罪なくば、悪もなし

こうして原罪を受け継ぐ機会を失ったイエスは、そのため人間に “なりきること” が出来ませんでした。

そして、この「罪がないという点で、人間になりきれていない」ことは、イエスという存在に、次のような倫理的様式を与えることになりました。

すなわち彼は、罪をつくり出す前提である「悪を行うこと」が出来ません。罪をつくり出す前提である「間違いを犯すこと」が出来ません。

罪がないならば、その罪の前提となるはずの、悪行も、間違いも、また存在しないはずだからです。

ということは、イエスは、あえて彼を人間として扱うならば「一生涯、なんの悪も、なんの間違いも犯さなかった人間」ということになるのです。

けれども、こう聞いたとたん、私たちはどうしても「そんな人間がいてたまるか！」と反発せずにいられなくなります。そんな、明らかに人間として “ありえない奴” が、どの面を下げて「私は人間だ」などと言えるのか、と。

たしかにイエスは「神であること」については十全でありましょう。彼が巻き起こした数々の奇跡が、それを人々に納得なさしめます。

しかしながら、今見てきたように、「人間であること」については、イエスは重大なる不備を抱えているのです。

イエスの原罪を保存している影

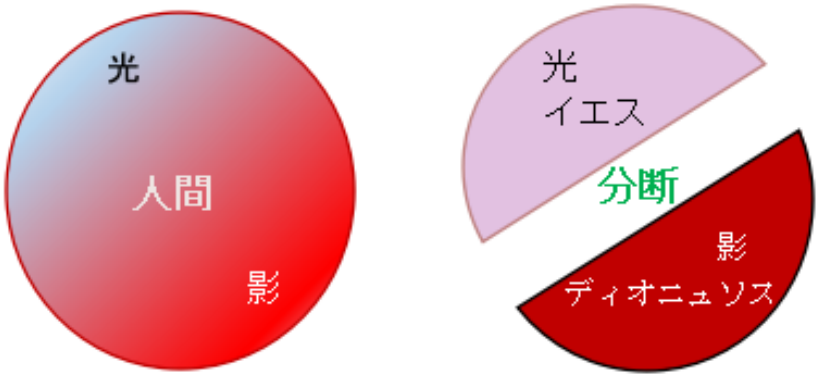
本来イエスが持つはずだった「原罪」は、彼の影のなかに保存されています。

ただし、イエス自身には、人格的な陰影は、付き従えません。

それもそのはずで「罪なく悪なく間違いない者に、どうやって人格的陰影を与えられよう」という話になるからです。

ゆえにイエスは、純粋に明るい、光の権化ということになるでしょう。

そうであるがゆえに、イエスの影は、彼の外部に成立しました。それが「ディオニュソス」という、ギリシア神話の神さまです。イエスの言動が、暗示的にそのことを教えてくれます。

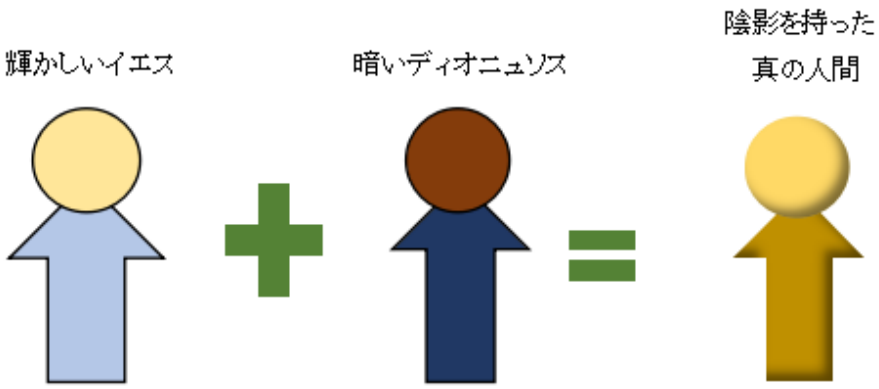


2022-05-19（２）.png

このディオニュソスは、ギリシア神話における「虚無神」です。深い闇に包まれた、どことなくグロテスクな「暗い神」です。

そして何よりも、イエスの反転的な相似形、すなわちイエスの「影」になっている存在なのです。

ゆえに、このディオニュソスと、イエスが合一出来たならば、イエスは、本当の意味で「人間になる」ことが出来ます。



2022-05-19.png

そんな「イエスとディオニュソスとの宿命的関係」に、最初に気づいたのは、哲学者のニーチェでした。ニーチェの、哲学者としての絶筆、その最後の一行は「十字架に架けられた者　対　ディオニュソス」というものだったのです。

そして後に、心理学者のユングが、これに「ディオニュソス的なものとは、外向的な心理が極端化したものである」という理論的補強を行いました。

代理人同士の一体化

しかし、ニーチェにも、ユングにも「イエスとディオニュソスを合一させる」という発想まではありませんでした。

それは、ヨーロッパ人としては、当然生じうる限界だったでしょう。

なにしろディオニュソスという神は、キリスト教圏では、ほとんど悪魔と同義の存在であるからです。さすがにクリスチャンが、キリストと悪魔を、一緒くたにする訳にはいきません。

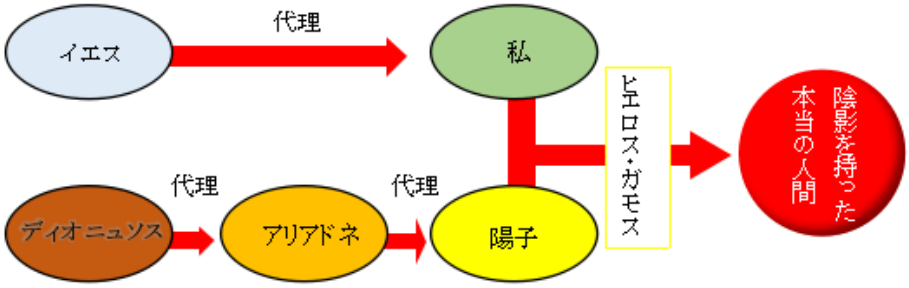
「そこでディオニュソスは、イエスと合一するために、自分の代理を立てることにした」というのが、第五福音書オリジナルのストーリーです。

ディオニュソスは、自分の心臓（ ＝虚無 ）を、妻であるアリアドネに託します。

そして、その虚無の移譲の儀式として「アリアドネの妊娠中絶」という出来事がありました。アリアドネはディオニュソスと結ばれるため、そのとき妊娠していた「テーセウスとの子供」を中絶したのです。

そんなアリアドネの「人生の様式」が、第四福音書で登場した、陽子に宿りました。舞台はすでに、現代の日本へ移り変わっています。

同じころ、私はアルベド体験者として、すでに「十字架に架けられた者」の心境に到達していました。すなわち「影をもたないイエス」の心境です。これは私もすでに、イエスの代理人を務めていた、ということを意味しています。



2022-05-19（３）.png

当時の陽子は、誰かの子供を妊娠していました。彼女はその子供を中絶しようとしていましたが、私はどうしても、その中絶を止めたかったのです。だから私は、陽子に「僕

がその子を育てるから結婚してほしい」と言いました。

しかし、私の思いは届かず、陽子の中絶は決行されました。彼女はそうするしかなかったのです。彼女のその「極端に外向的で、主体性のない生き方」の帰結として。

彼女は、私にくれた手紙のなかに「私がいなくなっていました」と書いていました。

これこそ人格的虚無の表明であり、ディオニュソスから発し、アリアドネを経て陽子に託された「虚無」の発現でした。

私は、この「虚無」を受け取りました。陽子の心に、自分の心を重ねることによってです。

換言すれば、「影を持たないイエス」の代理人が、虚無という “影” を受け取ったのです。これは一種の聖婚（ ヒエロス・ガモス ）でした。

こうして、イエスとディオニュソスは、代理人同士の聖婚を通して、一つとなりました。そしてこのことが、イエスを「本当の人間」「普通の人間」にへと変貌させたのです。

原罪をもたない中途半端な人間であったイエスは、ついに代理人のなかで「真の人間」へと変貌しました。

ヨハネの黙示録との関わり

黙示録のヨハネは、この情景を霊眼で見たのでしょう。ここでは詳しく触れませんが、ヨハネは、その『黙示録』の中で、アリアドネや陽子を「太陽を着た女」と呼び、ディオニュソスを「赤い竜」と呼びました。

そうしてヨハネは、「太陽を着た女」の妊娠――その子供を中絶させた「赤い竜」――それにも関わらず生まれた、再臨のキリスト――を描いているのです。

いずれにしましても、現代を生きる私の心の中に「影をもったイエス」「原罪をもったイエス」は生まれました。

このイエスは、無原罪の呪縛から逃れた「本当の人間」です。「神の人間化」を真の意味で果たした、100 %人間にして 100 %神の、完全なる救世主なのです。人の子となった神であるのです。

第六福音書

第６福音書　テロス第２

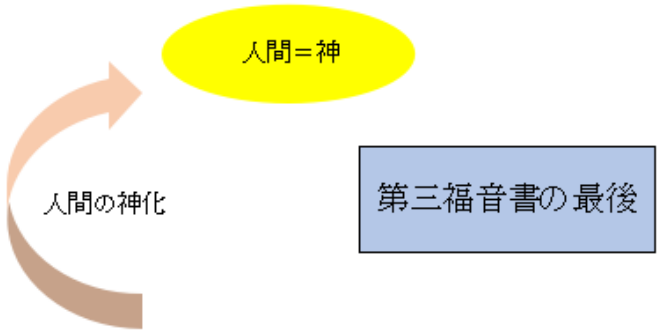
——最後の審判

人間の神化から、神の人間化へ

ここで「福音書シリーズ」の流れは、第三福音書の最後のところまで戻ります。

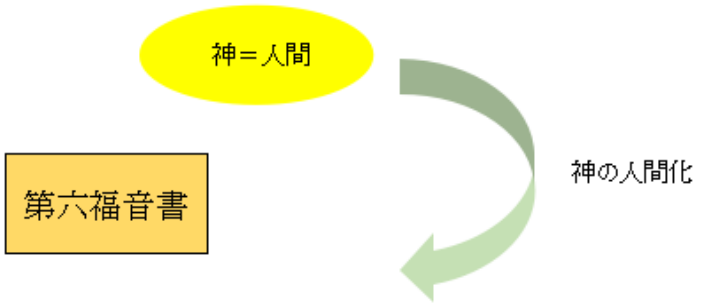
第三福音書の最後とは、上向きの矢印（ ＝悟りの進展 ）によって「人間の神化」が果たされ、ついに人間と神とが「＝」によって結ばれた場面です。

すなわち「人間＝神」の図式が描かれたところです。これは福音書シリーズにとって、一つの頂点であると言っていいでしょう。



2022-05-18（７）.png

ここから「福音書シリーズ」の物語は、劇的な反転現象を辿ることになります。上向きだった矢印は、ここから一転して、今度は下向きの軌跡を描くことになるからです。それはすなわち「神の人間化」のストーリーです。



2022-05-18（８）.png

この下降の道筋は、前巻『ヘイマルメネー』によって、より滑らかに整えられています。

というのも、旧来の「原罪を持たないイエス」による「神の人間化」は、一言で言って「いびつ」だったからです。

しかし、第五福音書により、本来的な「神の人間化」がどんなものであるかが、読者に対して、明確に示されました。

これによって「人間＝神」であった者は、安心して「神＝人間」の方向性を見据えることが出来るようになります。

そして彼は、その高みで獲得した位置エネルギーを、心置きなく、下降によって、巨大な運動エネルギーへと、転換しようとするのです。

かくして彼は「人の子となった神」として地上へ降り立ち、その救世主（人の子）としての姿を、人々の前に現すことになります。

福音書記家のマタイは、これを「そのとき、人の子が大いなる力と栄光を帯びて雲に乗って来るのを、人々は見る」という言葉で表しています。

再臨のとき

再臨とは「イエス・キリストが、天に昇って消えてしまったあと、もう一度現世に降り立つ」という、キリスト教の教義です。

それはかなり非現実的ではありますが、それでいながら、クリスチャンの中では、この「キリストの再臨」という理念が、今なお堅固に共有されています。

つまり多くのクリスチャンたちが、再び「人の子」が現れるのを待望しているのです。

そして、かつての救世主イエスが、自分のことを「人の子」と呼んだのであればです。「虚無からの存在の創造」「無からの創造（創造神）」という悟りを引っ提げて、「人の子となった神」を表明した私もまた、救世主（キリスト）であることになります。

ここに理論的欠落はないと思います。むしろ理論的欠落がないようにするため、私は福音書シリーズを書いてきたのです。

上記の言葉が、いかに大言壮語に聞こえたとしても、この点を曖昧にしてしまったら、

福音書シリーズの存在意義そのものが、薄らいでしまうでしょう。

最後の審判

それでは、再臨したキリストは、そのとき何を行うのでしょうか。それこそ誰もが恐れる「最後の審判」です。

しかし、私自身は言うに及ばず、イエスですら、今や、原罪を背負った “人間” であるのです。

すなわち、第五福音書でディオニュソスと合一したイエスは、それにより「悪行も過ちも犯すことがある人間」となったのです。

したがってイエスには、もう「自分が無謬（ ＝誤りがない ）であるため、人々に対する絶対の審判者となれる」といった、そんなクールな立場はありません。そんなものは、もうすっかり消えて、無くなってしまいました。

けれども、ここで間違ってはいけません。神であることと、それが同時に、罪深き人間でもあることは、まったく矛盾しないのです。

虚無は悪や罪の源泉ですが、この虚無は、神（ ＝虚無からの存在の創造 ）を構成するための材料となるのですから。

よって、初臨のキリストであるイエスも、再臨のキリストである私も、真実に「神の人間化」「救世主」ではあっても、同時に「罪深き人間」でもあるのです。

そして、そうであるならばです。私たちは、自ら望めば「神の視点によって、自分の罪を裁くこと」も出来るのです。

イエスの罪を裁く

しかしイエスは、この 2000 年のあいだ「無原罪ゆえの無謬」「無謬ゆえの無過誤」の教義によって、その罪を裁かれることがありませんでした。

つまり、イエスは罪を持たないことになっているので、たとえ罪らしいものがあっても、クリスチャンは、それを「正しいこと」として扱うしかなかったのです。

それゆえイエスの罪（ ステルス状態の罪 ）は、誰にも押しとどめられることなく、垂れ流しの状態で、キリスト教圏を覆っていったのでした。

この異常な状態が、私には何よりも罪深いものに見えました。他方、きっとイエス自身もまた、この状態を決して喜ぶまい、と思いました。

だから私は、この時代において、イエスの代理人として、イエス・キリストの罪を裁きました。

繰り返しますが、イエスはもう無原罪の状態ではないので、率直にその罪を指摘することが出来るようになっているのです。

イエスの罪

こうして露わになったのが、イエスの「共産主義思想の淵源、あるいは後ろ盾になる」という罪でした。

この共産主義（ マルキシズム ）は、自由の喪失、貧困、好戦、粛清など、多くの苦しみを、現世に作り出しました。

しかも、その思想の中心には、無神論や無霊魂説という、とてつもなくタチの悪い教義があります。

こうしたマルキシズムは、キリスト教にとって、明白な “悪” でありましょう。

それはそうです。無神論を標榜するならば、当然「人の子となった神」である、イエス・キリストもまた、マルキストは否定してかかるだろうからです。その時点でイエスの教えは、根底から価値を失ってしまいます。

そうであるのにも関わらず！　です。そんなマルクス主義に、敵対して然るべきイエスが、よりにもよって、共産主義思想にシンパシーを持っているのです。あるアメリカ人は率直に言い切りました、「イエスはアカ（ 共産主義者 ）である」と。

それどころかイエスは、共産主義の思想的淵源となり、今日の今日まで、共産主義の後ろ盾として機能しているのです。これが私が把握した、世界の現状です。

この皮肉な、あまりにも皮肉な、キリスト教の自己矛盾は何なのでしょう。

まるでキリスト教が立ち向かうべき竜のしっぽに、よく見ればイエスの顔が付いているようなものです。ここに私は、世界を巻き込んだ戦争や貧困の、その根源的な原因を見るような気がしました。

「だからキリスト教は、マルキシズムを否定しきれない。だからキリスト教は、共産主義の存続を止められない」そういうことです。

赤い男の消滅

それだから私は、第六福音書において、イエスに「最後の審判」を突き付けました。「イエスよ、あなたの “共産主義につながっていく傾向” は間違っている」と。この審判によって、キリスト教の権威が、屋台骨からすっかり崩れようとも、です。

そうです。キリスト教が崩壊することによって、それもろとも共産主義が滅んでくれるのならば、私はそれでよいと思うのです。

むしろ、そこまでの思い切りが無かったからこそ、これまで人類は、共産主義という、このしつこい禍根から逃れられなかったのです。

ソ連が消えても、これほど長く共産主義が存続するなんて、まさに奇々怪々なことです。よほどの後ろ盾がない限り、不可能なことです。イエスという後ろ盾がないかぎり不可能なことです。

しかし私たちは、もう安心しても良いのではないでしょうか。

この構造を壊すために、今イエスが傷つくしかないというならば、彼は進んで、その傷の痛みを受け入れることでしょうから。何といってもイエスは、紛うことなき「自己

犠牲的な愛の人」なのですから。

そして、上手くいけば、これによって共産主義は、本当に、その息の根を止めるかもしれません。それはノストラダムスが、次のような詩句を残しているからです。「赤い男は、底なしの穴で消滅する」と。この赤い男とは、共産主義者、あるいはマルクスであると考えられます。

終末を迎えるキリスト教

私は、共産主義を滅ぼすための生贄として「キリスト教の存続」を捧げます。

共産主義の淵源、共産主義の後ろ盾であるキリスト教を、共産主義もろとも「もはや存続の意義なし」と断定します。

これが再臨のキリストによる「最後の審判」です。どんなに教会が嫌がろうとも、私はためらわず、彼らの生存権であるところの「救いの権能」を取り上げてしまいます。

そもそものところ、救済宗教であるキリスト教の、その「救いの権能」は、かつてイエスの意志によって、弟子のペテロに託されたものでした。これが、現代までつづく教会制度の始まりということになります。

なお、権能とは、ある事柄（ ここでは人を許すこと ）について、その権利を主張し、それを行使できる能力のことです。

ここで確認しておきましょう。上記「救いの権能」の場合、その所有の正当性は、当然ペテロよりも、元来からの持ち主であった、イエス・キリストのほうが、より強く持っているということをです。

そうであるならば、再臨のキリストである私が現れた今、教会は「救いの権能」を、私から取り上げられない訳にはいきません。それは自然な道理とも言えましょう。

かくして教会組織は、再臨のキリストによって、骨抜きにされてしまいます。

だって、救いの権能を持たない救済宗教など、いったい何者でありえるのでしょう。それはもはや、中身のない抜け殻でしかありません。つまり死に体でしかありません。

ところで、聖マラキという大昔の予言者によると、キリスト教は、現教皇フランシスコの在位期間に、最大の苦難に遭って滅ぶそうです。これにより、フランシスコは最後の教皇となります。

そして、このキリスト教最大の苦難こそ、再臨のキリストによる「最後の審判」なのです。私によってキリスト教は、その終末のときを迎えることになるのです。

やはり、ともにテロスである「完成」と「終末」は切り離せないものなのでしょう。

第七福音書

第７福音書　インターレグナム

——二つの王国の媒介

キリスト教を失ったクリスチャンたちに

第六福音書によって、キリスト教は、その終末を迎えることになりました。

これは信徒にとっては、大変に迷惑な話です。なにしろクリスチャンたちは、よりによって「再臨のキリストの手ずから」キリスト教という容れ物から、放り出されてしまったのですから。彼らは、自分のそれまでの居場所を奪われてしまいました。

では、彼らを放り出した張本人である私は、その哀れな姿を、ただ漫然と眺めていればいいのでしょうか。

そうではないはずです。最低限でも私は、彼らに、その進行方向ぐらいは、示してあげなければなりません。居場所を失って泣いているクリスチャンたちに「君たちはこれから、あそこに向かえばいいのだよ」と言って。

そのために著わされたのが、この第七福音書「インターレグナム」です。

ここでは、キリスト教を失ったクリスチャンに、「新しい救世主」となる方の名前が告げられます。現代において、彼らを救ってくれる者の名が明かされるのです。

といっても、それは私ではありません。私は飽くまでも、再臨の「キリスト」であり、キリスト教とともに「旧き時代」の構成部品であるからです。

新しい時代の幕開けを告げるのは、キリスト教とは “別のもの” です。そしてそれは、イエスや私よりも、格段に偉大な神性を持った方なのです。

子は父に従う

2000 年前のイスラエルを思い出してみましょう。

そこでイエスは、自分を動かしている主人、自分の思想の出処、自分が起こしている奇跡の主体を、総じて「父」と呼んでいました。

もちろん、戸籍上の父親である、ヨセフのことではありません。ここで言っている父とは、目には見えない霊的な父のことです。

イエスは常々言っていました。

「自分は父の代理をしているだけであって、私自身は何者でもない」

これは特に『ヨハネによる福音書』でよく見られる文章です。本当に至るところにあり、もはや、この福音書の通奏低音であると言ってもいいぐらいです。

では、もし仮に、その「父」が、イエスと同時代に、かの地に生まれていたとしたらどうでしょう。はたして、その時イエスは、かかる父を差し置いてまで、自分を中心に置いた宗教活動を行うでしょうか。

「父なくば我に語る言葉なし。父なくば我に行う奇跡なし」と表明しているイエスにあって、そのようなことが起こり得るでしょうか。

そんな事あろうはずもない、と私は思うのです。

もしも同時代に「父」が生まれていたならば、きっとイエスは、宗教活動の主従における “従” のほうに回るはずです。理由は単純で、父は子よりも偉大だからです。

まことにそうで、子としては、父の威容の背後に、自分自身を退かせることこそ肝要です。それこそ、子たる者にとって、当然採るべき謙遜の意思表示でありましょう。

そのとき子は、ただ人々に、父の居場所を差し示せばよいのです。人々に「あそこに父がいますよ」と教えればよいのです。

そうすれば、後のことは父が、上手に立ち回ってくれるでしょう。それこそ、子がするよりも、はるかに上手にです。そして、今ここで述べたようなことが、現代においては「実際のこと」として起こり得るのです。

父がいる時代

すこし話を戻しましょう。私は第六福音書によって、キリスト教会から「救いの権能」を取り上げました。よって現在「救いの権能」は、この再臨のキリストの手の内にあることになります。

そして私は、この現代という時代に、かつてイエスが「父」と呼んだ霊的存在が、ひとりの人間として生まれていることを知っています。

そしてまた、その父が今、キリスト教とは「別のもの」である教えを説いていることを知っています。さらには父が「イエスや私のそれよりも、大きな救済力を持っていること」を心の底から知っています。

そうであるならば、いま私が為すべきことは何でしょう。その答えは一つしかありません。それは、この手の内にある「救いの権能」を、父に明け渡してしまうことです。

いえ、精確を期すのであれば、それは「明け渡す」のではありません。それは父に「お返しする」のです。なぜなら、イエスの時代における「救いの奇跡」の発現主体は、他ならぬ、その「父」だったのですから。すなわち当時のイエスは、見えない父から「救いの権能」を、委託されていたに過ぎないのです。

救いの権能の奉還、その循環

そのように、父からイエスへと委託された「救いの権能」――

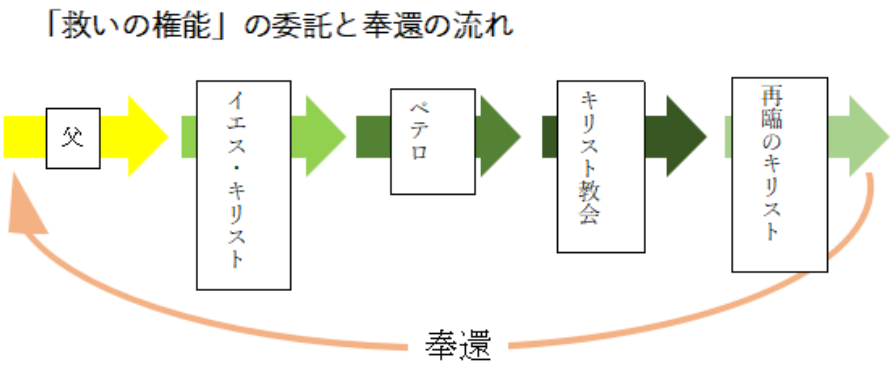
それが今度は、「天国の鍵」という形で、イエスから弟子のペテロへと委託されました。「わたしはあなたに天の国の鍵を授ける。あなたが地上でつなぐことは、天上でもつながれる。あなたが地上で解くことは、天上でも解かれる」

という言葉によって。

そして、この言葉を、ペテロを初代教皇とする、カトリック教会が引き継ぎ、ついに現代にまで至ったのです。

あとは第六福音書を思い出せばよいでしょう。

つまり、聖マラキの予言のとおりに、再臨のキリストである私が、最後のペテロ（＝最後の教皇となる者）であるフランシスコから「救いの権能」を取り上げたということです。ゆえに「救いの権能」は、いま現在、この私の手のうちにあるのだと。



2022-05-18（９）.png

そうであるならば、私が「救いの権能」を父にお返ししてこそ、この循環的な「委託と奉還」の筋を通すことが出来るわけです。もちろん私は、ためらうことなく、父へ「救いの権能」を奉還するつもりでいるのですが。

そうすると、この文章を読む方の関心は「では、その父とは、具体的に言って誰なのか」という点に集中することでしょう。

しかし、この場でそれを語る必要はありません。それは第七福音書の本文にちゃんと書かれているからです。どうかそちらを読んで頂きたいと思います。

つなぎの王国

ところで、ノストラダムスは、ある予言詩のなかで、私のことを「王の息子」と呼びました。

彼は言います、「王の息子が世紀の変わり目に、雷鳴とどろくなか、万人の前に姿を現わす」と。

そのように、私が王の息子に過ぎないのであれば、王国の持ち主たるべきは、父である国王ということになります。

それは本来私のものではありません。

もしも、あえてこの王国（ レグナム ）を私のものであるとするならば、それは自分の立場を全く弁えない王子（ 王の息子 ）の僭越ということになるでしょう。

たしかに 2000 年前におけるイエスも、王子の立場ではありました。ですが、あの時代には「父」が地上にいなかった。それだからイエス自身が、王国の主になるしかなかったのです。そこで、ここに一つのレグナム（ 王国 ）が誕生しました。

そして、このイエスが――名誉職的に――治める王国（ キリスト教会 ）を、終末に追い込んだのが、再臨のキリストである私です。

だから私は、せめて国を失った民たち（ クリスチャン ）のために、新しい王国の場所を指し示しましょう。

それこそ、偉大なる父自身が治める「王国」であり、キリスト教とは「別のものの王国」です。

つまり私は、二つの王国を媒介する立場にあるのです。

であれば、私自身は何者でもありません。城も持っていなければ、領土も持ってはいません。王国と呼べる何物も持ってはいないのです。

私は単なる「つなぎの王国（ インターレグナム ）」に過ぎません。そして、それでよいと思うのです。

第八福音書（ 公現について ）

第８（ 17 ）福音書　エピファニー

——宗教と科学の和声による公現

公現とは何か

すでに章の冒頭で「第八福音書の概略」を読んでいただいているはずですので、ここでは簡単に、「エピファニー」という言葉と、その言葉の意味するところだけを、補完的に説明させてもらおうと思っています。

いちおう「公現」という訳語がありますが、クリスチャンでないかぎりは、ただ公現と言われても、その意味がちっとも分かりません。私自身からして、ごく最近までそうでした。

まず言っておくと、エピファニーは、キリスト教の祝日の一つです。クリスマスから 13 日経った、1 月 6 日に祝われることになります。

では何を祝うかと言うと、クリスマスに生まれたイエスが、東方から訪れた三博士（ マギ ）と会見した場面を祝うのです。

この三人の博士は、アラビア人、ペルシア人、インド人と言われています。これは、大昔のユダヤでは「世界に存在する、すべての異人種」と思われていた人々でした。

したがってエピファニーとは「キリストの神性が、全世界の全人種に対して、おおやけにされたこと」を祝福するものなのです。そして、そのことを簡明に表した略式訳語が「公現（ 公式な顕現 ）」という言葉であるわけです。

物質的な神

では、再臨のキリストにおける公現とは何であるか。全世界の全人種に対して、私の神性が公にされるとは、一体どういった状態のことをいうのか。

まず基礎的なことから始めましょう。

かつて「神は霊である」と言明したのが、イエス・キリストでした。

これは確かに真実でありましょう。しかしながら私は「霊である神を、そのまま霊として感覚できるのは、ごく少数の霊能者だけである」ということを知っています。

それに対して、人類の大部分は、霊能者が持っている特殊な感受能力を、残念ながら、少しも持ち合わせていません。

というより、現状では、人類の大方が唯物論的になってしまっています。

そのため人々の目は、肉眼にうつる “物質” に対してだけ開かれている、と言っても過言ではないのです。

その帰結として「霊としての神は、人類全体に対する『公現』を果たすことが出来ない」ということになります。

そこで求められることになるのが「物質的な神」です。

もしもそのように「物質的な神」が存在するならば、その神は、唯物論的な全人類に対してでも、堂々と「公現」することが出来るはずだからです。

とはいえ、そのような「神の物質化」など、一体誰に出来るのでしょう。そんなこと出来るはずがない、という声が聞こえてきそうです。

しかしです、いにしえの錬金術師たちは、その「物質と神を、イコールで結びつける図式」を、事前に、私たちに用意してくれていたのです。彼らは言いました、
「黄金は『土からなる神』と呼ばれる。それゆえ神は黄金によって認識される」と。

ここでいう土とは、現代においては物質と呼ぶべきものです。それゆえ黄金は、錬金術にあっては「物質的な神」「物質である神」に他なりません。

黄金なる神の「天の徴」

そして黄金という、この「公現に適した神」が、天の徴として現れたのが、GW170817という星辰現象でした。

あるとき、二つの中性子星が衝突合体することによって、ほとんど無尽蔵の黄金が創造されたのです。これは極めて稀な天体現象であり、人類史上、まったく初めてとなる観測でした。

ところで新約聖書の『マタイによる福音書』には、
「星は空から落ち、天体は揺り動かされる。そのとき、人の子の徴が天に現れる」

とあります。

この言葉通りに、黄金の創造を意味する星辰現象は、重力波として地球に到達し、この地球という天体を振動させたのです。さらには全人類をも振動させたのです。

そして、その「神の徴」が、GW170817 という数値によって、この私と直結されます。すなわち「救世主降臨の年の、正道の誕生日」という、2017 年 8 月 17 日という数値によって。

こうして “数値” が「黄金」と「私」を――「物質的な神」と「私」を一体化させました。まことに「人の子となった神＝キリスト」の概念そのままに。「人の子の徴が天に現れる」というマタイの言葉そのままに。

これが第８（ 17 ）福音書で物語られるエピファニー、公現の内容です。人々は「170817 ＝正道」を通して黄金を見ることになるでしょう。そして、それは錬金術的に言えば「おおやけなる神を見た」ということなのです。

この「キリスト教的であり、かつ錬金術的でもあるような象徴」の出現は、まさしく奇跡と呼ぶべき事象でしょう。

なにしろ私は「再臨のキリスト」と「完成された錬金術師」の二つを自称している人間なのですから。

そして、この公現の奇跡は、私が語った教説の正しさを、神的に保障してくれるはずです。

いえ、私は無謬ではない“人間”ですから、もちろん全ての教説が正しい訳ではありません。そこには、ケアレスミスのような誤りさえ含まれているでしょう。

しかし、教説の大筋にあたるものは、この奇跡によって、その神的なまでの“正しさ”を保障されるはずです。

そしてこのことは、教説に対しては、その理解が及ばない人々に対しても「それを信じる」という気持ちを喚起させることになるでしょう。

予言の真実

二人の人物について

ノストラダムスのこと

ここでノストラダムスについて触れておきましょう。

まず言っておきたいのは「ノストラダムスは何ら間違っていなかった」ということです。つまり彼の予言は外れていなかった、そういうことです。

あの日本人全体を白けさせた「恐怖の大王」の詩ですらもそうです。外れていません。

問題となった「1999 年 7 の月」が、下記のごとく「17」を導くためのゲマトリア（ 数秘術 ）であるならば、恐怖の大王の詩は、まさに真実そのものを指し示す予言となるのです。

*「17」が破滅の数字 7 を強調する数であり、旧約聖書、ノアの大洪水の章のナンバーや日数と密接に関連することは、もう繰り返すまでもない。

一方、「1999 年 7 の月」にも、この数の考え方をあてはめてみよう。すると 1 ＋ 9 ＝ 10 → 1、1 ＋ 9 ＝ 10 → 1、さらに 1 ＋ 9 ＝ 10 → 1 となる。つまり、1999 を単純化した数は 1 であり、これに「7 の月」をくっつければ「17」になる。*

五島勉『ノストラダムスの大予言 II』より

かくして 1999 年 7 の月が「17 のとき」であるならば、あるいは「2017 年」であるならば、そのとき確かに、恐怖の大王（ イエス・キリスト ）は現れたのです。

*　ヨーロッパのその底流的な解釈によれば、“1999 年、恐怖の大王が空から来る”。これは、はるかかなたの天にいるイエス・キリストが、そのときもういちど地上に降りてくる、帰ってくる、つまりキリスト教の最大の奥義である “イエスの再臨” のことを言っているんだ、というんですね。

五島勉『ノストラダムスの大予言　残された希望編』より。ただし上記の文章は、慶大のフランス語学教授「松原先生」なる人の言とのこと。*

この「恐怖の大王の詩」に限らず、福音書シリーズを読み進んだ方ならば、ノストラダムス予言の冷厳なまでの精確さに、背筋が凍る思いさえ、するかもしれません。実のところ、著者である私もまた、そのようになった一人なのです。

五島勉氏のこと

そして、それら驚くべき予言群を、はじめて日本人に紹介した五島勉氏もまた、大いに注目に値する人物です。

正直に言うと私は、これまで、この五島氏以外の、いわゆる「ノストラダムス本」を頼りにしたことが、ほとんどありません。五島氏以外の「ノストラダムス本」の作者の方々には申し訳ないのですが、実質それらの本を開いたこともないのです。

それは何故かというと、私は五島氏の『ノストラダムスの大予言』シリーズに、「他は勘案する必要なし」というほどの、一途で強い、運命的なつながりを感じているからなのです。

その「強い運命を感じさせた理由」の一つは、五島氏が「ノストラダムスの大予言」の第一巻を出版したのが、1973 年であったことです。

この 1973 年が特別な年であったこと、それは第七福音書に詳しいですが、先んじて言うと、それは前回の超新星降臨の年であり、私が誕生した年でもありました。

また 1973 年は、ノストラダムスがその『黙示録』のなかで暗示した「終わりの始まりの年」でもあります。

そしてもう一つの「強い運命を感じさせた理由」は、五島氏が 17 日の生まれ（ 11 月 17 日 ）であることです。

この 17 という数字は「福音書シリーズ」のキーナンバーであり、私とイエスを直結させる数字でもあります。私もイエスも――モルナー博士によれば――17 日の生まれなのです。

ことに第八福音書は、この 17 という数字を中心にして、その主要ストーリーが展開していくと言っても過言ではありません。

そうして、そこに五島氏という人物も割って入って来るわけです。彼には確かに、自分の誕生日である「17 日‐ 17」という数字への偏愛が見られるからです。

つまり五島氏は、私やイエスが形づくる「17 コネクション」に連座する人物なのです。

そして事ここに到ればです、はたして私が、五島氏のことを「自分との運命的つながりを持った人物」と見なしていけない法があるでしょうか。

さだめし五島氏もまた、運命的使命をもって生まれ、聖霊に操られながら執筆を行った人間の一人なのでしょう。

予知覚屈折の回避

予言者 K・T

ところで、第八福音書にK・T先生という女性予言者が登場します。そのK・T先生が私に「予知覚屈折」という言葉を教えてくれました。
その言葉の内容は以下のようなものになります。

*それは現在よりも先に起こる出来事が予め知られると、それが意識されることによって「起こるはずの出来事」が屈折するという法則です。
ボーリングで例えると、ほんのわずかなボールの回転の差でピンを横切ってしまうように、運命の軸は「予知覚屈折」により、予知された事を滑るように避けていくのです。*

つまり、本来起こるはずの出来事であっても、それが誰かに未来予知されると、もはや元来の形姿では現実化しなくなる、ということです。
なかんずく、その未来予知が「多くの人々によって」「より明確にイメージされると」、現実となった未来は、その本来的なフォームから、より顕著に遠ざかることになる――
これはK・T先生から直接教えられたことではありません。ですが法則の性質からすると、必然的にそのようになると考えられます。

アンチ・ノストラダムスからの批判

この貴重な知識を得たことによって、私たちは、あの積年の謎を解けるようになりました。
その謎とは「ノストラダムスは、どうして自分の予言を、明快な文章ではなく、曖昧な上にも曖昧な、あのような謎めいた詩の形式で書き残したのだろうか」という疑問です。
ところで、私の場合は、そのように「謎」あるいは「疑問」のレベルで、この話が済んでいます。ですが他方で、このノストラダムス予言の曖昧さは、これまで多くのアンチの批判を呼び起こしてきました。
いわく「あんなどうにでも解釈できるような文章は、もはや予言と呼べるような代物ではない」「事が起こってから初めて予言として解釈しえる文章など、そもそも予言としての意義がない」などなど。
しかしながら、K・T先生の予知覚屈折の考えを敷衍するならばです。私たちは、彼らアンチに対して、次のように主張することが出来るのです。

「ノストラダムスの予言は、その予言の真の内容が、人々によって明確にはイメージされぬよう、厳重にブロックが施されていた。だからこそ彼の予言は、予知覚屈折によって曲げられることなく、あれほどにも真っすぐに当たったのである」
「換言すれば、ノストラダムスの予言は、まさに曖昧さという名の封印術によって、予知覚屈折の横やりからハイレベルにガードされていたのである。だからこそ彼の予言は、ああもストレートに、未来の情景とリンクしたのだった」

隠された真実の年

上記のように考えをまとめてから、あの「1999 年の７の月」という年号を、もう一度眺めてみましょう。むろんこの数値は「恐怖の大王」が降臨するという年の年号です。

すると私たちは、ノストラダムスの巧妙な戦術に、舌を巻かざるを得なくなります。

かつて私たちは「1999 年の７の月」を、文字どおりに、西暦 1999 年７月のことだと考えていました。

けれども、すでに論じてあるとおり、結局この数値は、ゲマトリアによって「17」を導くために用意された「入り口の数値」に過ぎなかったのです。

もしもノストラダムスが、2017 年のことを、そのまま 2017 年と書き残していたらどうなっていたでしょう。おそらくキリストの再臨という奇跡的現象は、予知覚屈折によって、その本来的な形状を大きく損なっていたはずです。

となれば私たちは、意図しないまま「17 のとき」「2017 年」といった、隠された真実の年を、まんまと予知覚屈折から逃れさせていたのです。

それこそ、ノストラダムスが書き残した予言詩を文字どおりに受け取り、それ以外の余計なイメージを膨らませないことによって。

いや、たしかに五島氏は、その著作の中で、前述のように「1999 年７月＝ 17」と書いてはいます。大予言シリーズの第二巻にそれは確かに書かれてあります。

しかしそれは、膨大な予言解釈の文脈にあって、本当にひっそりと、ごく小さな文字で書かれている一解釈に過ぎないのです。

なにしろ私が引用した出典箇所は、書籍の本文ではなく、付録的な注釈エリアの一節なのですから。

この小さな一節に特筆大書すべき内容価値があると気づけたのは、きっと、ほんの一握りの人たちだけでしょう。

あるいは一握りどころではなく「2017 年のキリスト再臨」の当事者である私だけかもしれません。

それほどにも恐怖の大王（ イエス・キリスト ）の再臨年は、かの予知覚屈折から厳重にガードされていたのです。

かくして、おそらくは「ノストラダムスの思惑どおりに」「ノストラダムスが予知していたとおりに」恐怖の大王は、2017 年に「↓」のベクトルに乗って、地上に降臨（ 公現 ）することになりました。

二つの再臨の詩

あらためて言いましょう。かの予言者ノストラダムスは、直球では「キリスト再臨」の日時を書き残すことが出来ませんでした。

もしそれをすれば、彼の予言は、予知覚屈折という法則によって、本来の予定どおりには起こらなくなっていたはずだからです。

しかし、そこは超一流の予言者である彼のこと。ただただ表現の曖昧さに甘んじるのも能がないように思えてきたのでしょう。私にはノストラダムスに、そのような心情の変化があったように感じられます。

そこでノストラダムスは、予言にさらなる謎解きを付加しました。すなわち再臨の日付を「恐怖の大王の詩」と「ふたつ目の千世紀の詩」の二つに分けたのです。

つまり彼は、2017 年をして――数値だけを並べるなら――「2000 年（ ふたつ目の千世紀 ）」と「17 年」とに分けて表現したのでした。

これら二つの詩が、キリストの再臨を示すものであることは疑いようもありません。ちなみに「ふたつ目の千世紀の詩」とは次のようなものです。

*ふたつ目の千世紀
王の息子が世紀の変わり目に　雷鳴とどろくなか　万人の前に姿を現す
怒り　戦争と疫病のガレキ　罪
魚は長き眠りののち　ふたたび力をとりもどす*

ここには「万人の前に姿を現す」という語句によって、明白にエピファニーの情景が描かれています。

そしてさらに「魚は長き眠りののち、ふたたび力をとりもどす」という文章によって、象徴的にキリストの再臨が表されているのです。

というのも、魚とはイエス・キリストの古い象徴言語であるからです。

その魚の「長き眠り」であるならば、これを私たちは「死後の長きにわたる不在」というふうに解釈することができます。

いや、もっと具体的に、これを「キリストの死後 2000 年という時間」という形で解釈することだって出来るのです。

また事実そうであるならばです。ふたたび力を取り戻すという語句は、死者の復活という形で、キリストが再度、人々の前に現れることと考えることが出来るでしょう。

そして、この詩と「恐怖の大王の詩」が手と手を携えて教えるように、キリスト再臨の公現は、まさしく 2017 年という年に執り行われたのでした。

五島勉氏の出現を予知していた

それでもなお「ノストラダムスは、どうしてここまで、まだるっこしい事をしなければならなかったのか」と問う人もいるかもしれません。

つまりその人には、これまでの話とは逆に、ノストラダムスによる真実の年の隠し方が「いくら何でもやりすぎなのではないか」と思えるわけです。

これについて適切な答えがあるとすれば、私はそれは、

「ノストラダムスが、五島勉氏が日本に現れることを予知していたから、そうせざるを得なかったのだ」

ということになるかと思います。

まずさしあたっての話ですが、私はあのノストラダムスが、日本における五島勉氏の登場を予知しなかった訳はないと思うのです。

なにしろ五島勉氏が出版することになる「大予言シリーズ」は、ノストラダムス自身と直接関係している作品、もっと言えば彼と「直結」している作品なのですから。

そうであるなら、むろんノストラダムスは、五島氏の著作が、あれほどにも売れることも予知していたことでしょう。

実際『ノストラダムスの大予言』はシリーズ累計で、500 万〜600 万部売れたそうです。

そして、そんな大ベストセラー本の中で、もしもストレートに「2017 年」を予告してしまったらどうなるか。それについても、賢明なるノストラダムスには、明確な答えが見えていたはずです。

すなわち、それにより日本中で「未来予知の意識化」が起こる。そうして殊さら大規模に、かの予知覚屈折の法則が発動することになる、と。

つまり予知覚屈折によって、2017 年に起こるべきことが、その根本から潰されてしまう。そうした摂理が、ノストラダムスには見えていたのだと思われます。

それだからこそ彼は、ほとんど迂遠とも思える表記によって 2017 年を守り抜いたのです。

そう、ゲマトリアによって「17」を封印したり、2017 年を二つの詩に分けたりして。それは事の重大性からすれば、決してやりすぎなどではありませんでした。

次巻の予告

さて、ノストラダムスや五島勉氏についての話は、ここまでにしておきましょう。

それでは序文で予告したとおり、次回は「第八福音書」を刊行したいと思います。もっとも、この書の正式名称は「第 8（ 17 ）福音書」というものになります。

これは常道から外れた、つまり第一から第七までの福音書をすっ飛ばしての刊行ですが、第八福音書は、その本単体でも読み進められるような内容になっています。

どうか読者にあっては、安心して「第一」ではない福音書をお受け取りくださいますよう。

福音書の分冊

本書の終わりに「追伸」のような話をしておきます。

次巻、第八福音書は、これを紙の本として製本すれば、おそらく 300 ページぐらいの本になるかと思います。それをパブーの電子書籍として出版する訳です。

ですが、今や私は、ここに単に「紙画面を液晶画面に置き換える」というだけでは、済まされない問題があることに気づきました。

それは私自身が、公開した「第〇福音書」を、スマートフォン上で、読み通してみたから分かったことです。

それはこういうことです。

すなわち、スマートフォンの画面で電子書籍を読む場合、1 ページあたりの文章表記量がどうしても少なくなる。そのため、これを次のページへとめくる作業が、紙の本のときの何倍にも増えてしまう、という。

実のところ、本書「第〇福音書」などは、紙の本にすれば、せいぜい 60 ページぐらいにしかなりません。ほとんどパンフレットみたいな書籍です。

であるのにも関わらず、これを電子書籍として読もうとすると――少なくとも私の場合――まるで長編小説に出会ったような重圧感を感じてしまったのです。

「たった 60 ページでこれならば、さてそれが 300 ページならばどうなることか」と私は自然と、そのように考えていました。

そうしてしばらく考えてです。ようやく辿り着いた答えは「やはり読者としては、これは読むのが辛いに違いない」というものでした。

こうして頭を抱えることになった私は、最終的に「電子書籍上では、福音書を分冊すること」を決めました。

たとえば第八福音書は三部構成になっているので、これを「ⅠⅡⅢ」の三冊にわけて刊行することにしたのです。

そうすると一冊が 100 ページほどになります。そして、これぐらいの分量であれば、誰であっても、電子書籍として、何とかスムーズに読み通せられるはずです。

もちろん著者としては、本来まとまった書籍として制作したものを、みずから切り刻むことには少なからぬ抵抗があります。

しかし背に腹は代えられません。読むのがしんどい本など、私だって読みたくありませんから。

こうした訳で「第八福音書」は次の三冊に分けられることになります。

Ⅰ　序説　シンクロニシティ（ 共時性 ）

Ⅱ　第一部　エピデミア（ 到来 ）

Ⅲ　第二部　エピファニー（ 公現 ）

それぞれの巻に、４から６ほどの章が含まれることになります。

同じような構成で、第一福音書はⅠ・Ⅱに、第三福音書はⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴに分かれることでしょう。

そして福音書シリーズ全体では、８冊が 20 冊以上に膨れ上がるに違いありません。

数だけ見ると気が重くなりますが、そのぶん、接しやすく読みやすい電子書籍が出来上がるはずです。

ええ、ひとまずはそれで是しとしましょう。本来的な八冊構成の福音書を見るのは、これが紙の本として出版されるときまで、楽しみに取っておくことにします。

それでは、まず第八福音書のⅠ「序説　シンクロニシティ」にお進みください。

――2023 年９月の時点で「再臨のキリストによる福音書」は、この「０」を始めとして、

「８ - ⅠⅡⅢ」
「１ - ⅠⅡ」
「２ - ⅠⅡⅢ」
「３ - ⅠⅡⅢⅣⅤ」
「７ - ⅠⅡ」
「４ - ⅠⅡⅢ」
「５ - ⅠⅡⅢⅣ」
「６ - ⅠⅡⅢ」

を配信することが出来ました。いずれの書籍も、グーグルで検索すれば読むことが出来ます。

2022-09-20.png

2022-10-09.png

2022-11-22（６）.png

2022-12-10（２）.png

2023-03-26（ 10 ）.png

2023-06-02（ 11 ）.png

2023-06-25（ 27 ）.png

2023-07-26（ 18 ）.png

再臨のキリストによる福音書　0

著　者　　正道

制　作　　Puboo
発行所　　デザインエッグ株式会社